

国民総中流の時代はすでに終わりを告げ、今はむしろ社会経済格差が拡大していると言われている。医療費における自己負担率の引上げや、年金制度における給付額の引下げなど、経済的に苦しい立場にいる者にとってはますます厳しい社会になりつつある。さらに、将来に不安を感じる社会になってきたことは多くの国民が認めていることでもある。

このような状況を背景に、医療従事者としての経験を持つ筆者は、今日みられる国民間の経済格差の拡大がもたらす健康への弊害をさまざまな研究者らによる先行研究を用いながら丁寧に、かつわかりやすく論じている。

筆者はこの本のなかで三つのねらいを定めている。

まず第一の狙いは、医学・医療従事者、公衆衛生関係者など健康に関わる人々だけでなく、社会（保障）政策・経済政策に関わる人など、社会のあり方を考える人々に向けて、現在進められている新自由主義的な構造改革によってもたらされる「勝ち組」と「負

け組」に二極分化する格差社会が招くもの、それが比喩としての「痛み」ではなく、「死」をも意味する健康被害であることを伝えることである。

筆者によると、ストレスにさらされているのは、社会から排除された底辺層だけでなく、中間層も「排除され転落するかもしれない」という不安、そしてそこから逃れるための長時間労働などのストレスにさらされており、このような社会的・心理的ストレスが身体のだまざまな反応を引き起こし、死への危険性が高まるといふ。

第二の狙いは、主に健康づくりや介護予防に関わる専門



Book Review

「健康格差社会」

近藤 克則 著

職者とこれらの政策立案者に向けて、戦略の見直しを提起することである。介護保険制度では、来年度から要介護度の低い高齢者を対象に、筋力トレーニングなどを取り入れた新予防給付を実施することとなったが、このような危険因子を持つ個人への介入がもつ問題についてEBM（根拠に基づいた医療）の概念を用いながら説明している。

第三の狙いは、従来の「生物・医学モデル」の限界を示し、研究・臨床・政策のすべての領域における「生物・心理・社会モデル」への転換を主張することである。筆者はなぜ社会経済的な因子が身体

的な健康に影響を及ぼすのか、そのプロセスについての理論仮説を提示している。そして、個人の健康に影響を及ぼす因子と言われている「ソーシャル・キャピタル」の可能性について言及している。

批判的知見についての検討も怠ることなく、これらの狙いは着実に達成されている。本書のなかで論じられていることは、一部の読者にとつては必ずしも新奇なものではないかもしれない。しかし、国をあげての自殺予防対策が講じられるようになったことをかんがみると、タイムリーな内容であり、各地で行われている対策が功を奏するためには不可欠と思われる視点が盛り込まれている。

また、とくに臨床の場で大半の時間を個人の問題解決に費やしている人々にとつては、大きな枠組みで問題を捉え直し、新たな解決策を模索するうえで最適な一冊である。

■医学書院
定価2,625円